

第114回 三方限古典塾（'16, 4, 21）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 31）

- 1 人情世態は、倏忽万端たり。宜しく認め得て太だ真なりとすべからず。堯夫云う、「昔日我と云う所は、而今却つて是れ伊なり。今日の我は、又後來の誰に属するかを知らず」と。人、常に是の觀を作さば、便ち胸中の胃を解却すべし。

後集 57

（意訳） 人の心や世の中の様子は、たちまちの間にさまざまな様相に変わってしまう。だから、ある面だけを見て、それが真実だと考えてはならない。宋代の邵雍という学者は「昔、自分とと思っていたものが、今日は彼になっている。今日の自分は、この先誰になるか分からない」と言っている。人々がいつもこのような見方をしていれば、きっと胸の中につかえていたわだかまりも晴れるにちがいない。

（余説） 一つの立場や主義、考え方、価値観などに固執してはならないという忠告です。立場の変転はこの世の常であり、立場が変われば、ものの考え方も変わるのが常です。現在の自分を絶対視せず、相手の人格を否定するような発言は厳に慎むことです。そして、より大きな視点と変化という面から世界を見るようにしたいものです。そうすれば、心を捕らえている網が解かれて自由が生じ、他人を正しく理解できるかもしれません。

（参考） 山本夏彦「自分は正義と潔白のかたまりであり、政治家は人間の屑だと言いたげである。その椅子に座れば必ず自分もすることを、座らなかつたばかりに居丈高になるのを見て、国民は同じく居丈高になるのを喜ぶのである。」（文春文庫・世は締め切り・248p）

- 2 一の楽境界有らば、就ち一の不楽の相對待するもの有り。一の好光景有らば、就ち一の不好の相乗除するもの有り。只、是れ尋常の家飯、素位の風光のみ。纔かに是れ個の安樂の窩巢なり。

後集 59

（意訳） 一つの楽しいことがあると、それと相対的に一つの楽しくない心配の種が向かい合っているものである。一つの好ましい出来事があると、それと相対的に一つの好ましくない壁にぶつかって、嬉しさも相殺されてしまう。ただ、日常のありふれた食事を食べながら、平凡な生活のうちにこそ、人生のほんとうの楽しみがあるのである。

（余説） 仏教では、幸運・繁栄・豊穰をもたらす女神とされるのは吉祥天で、毘沙門天の妃です。妹は黒闇天で閻魔王の妃ですが、容貌醜悪で人に災禍を与える女神だとされます。厄介なことに、この姉妹はいつも一緒に行動しており、吉祥天だけの都合のよい来訪は期待できません。いわゆる俚諺にいう「楽あれば苦あり。苦あれば楽あり」「花に百日の紅なく、人に千日の好なし」です。だからこそ、順調に思えるときほど、謙虚に控え、慎重に構え、細かい気配りをする必要がありますが、これがまた殊更に難しいのは日常で見聞きするところです。人は見たくないものは見ても見えないものですから。

（参考） 老子・第58「禍いは福の倚る所、福は禍いの伏す所なり。孰か其の極を知らんや。」
呂新吾・呻吟語「富貴は家の禍なり。才能は身の殃なり。声名は誇りの媒なり。歡樂は悲しみの藉なり。故にただ順境に処するを難しとなす。」

3 簾櫳高 敞にして、青山緑水の雲煙を吞吐するを看ては、乾坤の自在なるを識り、
竹樹扶疎にして、乳燕鳴鳩の時序を送迎するに任せては、物我の両つながら忘る
るを知る。 後集 60

(意識) 高い格子窓の簾すだれを巻き上げて見晴らすと、青い山々や緑の流れが雲を呑み込み、霞を吐き出すのが眺められ、天地の自由自在な働きを知ることができる。また、竹や樹木の茂みで燕が雛を育て、鳩が晴雨を予知して鳴き、自然の営みを繰り返しているのを見ると、心は自然と一つになり、外界と自分との区別を両方とも忘れてしまう。

(余説) 現代は、ともすれば自然から遠ざかった生活になりがちですが、できるだけ自然に接する機会をもつように努めると、生きるうえで最も大切な何ものかが見えてくるのではないのでしょうか。それは、何も遠くまで出かける必要はなく、ごく身近な所にもさまざまの自然の妙はあります。自然に則った生き方こそ、これからの人生のキーワードであるように感じます。「命尽くして咲く路傍の草花」を見習いたいものです。

(参考) 老子・第25「人は地に法のつとり、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る。」
(人間の道徳その他の行動は、結局は自然の道を模範として、これに法り従うべきなのだ。ただ、道だけは最初からあり、天地万物を支配している絶対の存在であるから、外に法るということはない。道は自然、ありのままを則とする。)

4 成の必ず敗るるを知らば、則ち成を求むる心、必ずしも太だ堅からず。
生の必ず死するを知らば、則ち生を保つの道、必ずしも過ぎて勞せず。後集 61

(意識) 成功したらいつかは必ず失敗するものであるということを知ったならば、成功を求める気持ちも、必ずしもそれほど強くはならないであろう。

また、生きているものはいつかは必ず死ぬものであるという理ことわりを知ったならば、できるだけ長生きすることを願って、あくせくする気持ちも薄らいでくるであろう。

(余説) 宗教評論家のひろさちやは「完成したものは必ず壊れる」と表現しています。仏教では、世界の成立から破滅に至る四大期を、「成劫、住劫、壞劫、空劫」(四劫)として、これから逃れられるものはなにもないと教えています。

「平家にあらずんば人にあらず」と栄耀栄華を極めた平家一族も、源氏一族を保元・平治の乱(1153・1156)で政界から追った後は、壇ノ浦の合戦(1185)で滅亡するまで29年ととても短いものでした。

また、中国の戦国時代を天下統一し統一国家を建設した秦は、その始皇帝が郡県制の実施・度量衡や文字の統一・万里の長城建設など大きな成果をあげ、秦の名を外国まで広めました。その時代は前221年から206年(始皇帝の死後4年)とわずかに15年間でした。もっと短い例では、フランスのナポレオン一世の「百日天下」というものもあります。

生があるから死があり、死があるから生があります。長生きについて、500年ほど前にもこのような見方をした人がいたことは、私には一つの驚きでした。

(参考) 平家物語・冒頭「祇園精舎しやうじやの鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理ことわりをあらはす。おごれる人も久しからず。ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」